税の作文　2作品とも3年生の作品です。

「平等な学び」

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会　優秀賞

平等な学び

船橋市立潮中学校
第三学年
[redacted]

小学校から中学校で教科書の発行部数の差が大きく減ることに驚きました。価格がゼロ円と表示されていることに疑問を持ったことはありますか。今回はこのことについて調べたことと共に、私が考えたことを紹介していきます。

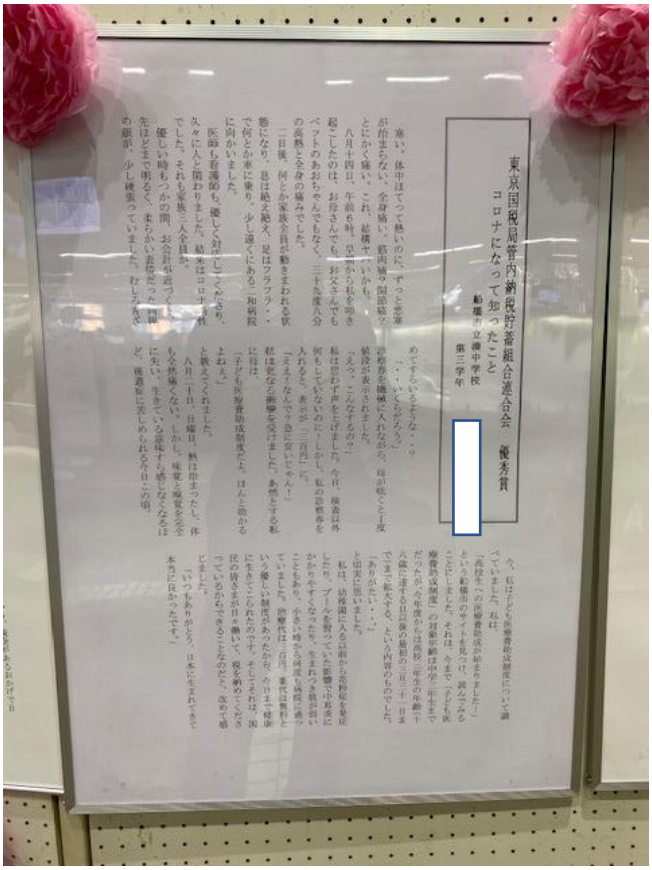
はじめに、小学校から中学校で使う教科書が無償で与えられているのは、日本国憲法第二十六条で義務付けられている義務教育教科書無償給与制度という制度があるためです。日本の将来を担う私達に、国民全体の責任をもって国民税金によって実施されています。義務教育教科書購入費として、約四百億円が計上されその全ては国民の納税によって成り立っているそうです。私達の人生の基礎となる義務教育期間を、義務教育教科書無償給与制度によって教育を受けられ、とても良い制度だと思います。しかし、毎年高い義務教育教科書購入費を払っていれば、現金の増加が心配されます。教科書をつくるための多くの資源が一瞬にして消えてしまいます。ペーパーレス化や電子化が重視されているこの時代に、この制度は合っていないように思います。そこで私は、教科書レンタル制度の良いところに二つあります。

一つ目は、環境に優しいところです。教科書は無償給与されることで、学年が変わる時に教科書を捨ててしまう恐れがあります。レンタル制にすれば、必要最低限の資源で多くの人が学ぶことができます。二つ目は、消費の防止や購入費の削減ができるところです。レンタル制であれば毎年の教科書購入費がないので、小額ですむと予想されます。また、物を大切に使うという考えが広められるので、安価よりとられると期待できます。また、物を大切に使うという考えが広められるので、安価な物を短期間使ってすぐ次の物を買うという

若い頃に大切なことを教えられると思います。教科書レンタル制度は実際にアメリカやイギリスで行われていて、多くの子の費用を小学校や家庭やホームの資源にかわいいそうです。

義務教育教科書無償給与制度は、多様な子ども達に等しく学びを保障するために向けての費用削減などに役立っていると思います。それぞれの二つに答えていく対立が今の日本には重要だと感じました。身近なところにある視点についてより深く知ることで、多様な意見がうまれさらに良い社会になると思います。

「コロナになって知ったこと」



東京国税局管内納税貯蓄組合連合会　優秀賞

コロナになって知ったこと

船橋市立潮中学校
第三学年
[redacted]

寒い、体中ほてって熱いのに、ずっと悪寒が治まらない。全身痛い、筋肉痛？関節痛？とにかく痛い。これ、結構ヤバいかも、と思ったのは、八月十四日、午前6時、早朝から私を叩き起こしたのは、お母さんでも、お父さんでもペットのあおちゃんでもなく、三十九度八分の高熱と全身の痛みでした。

二日後、何とか家族全員が動きまわれる状態になり、息は絶え絶え、足はフラフラ・・・で何とか車に乗り、少し遠くにある二和病院に向かいました。

医師も看護師も、優しく対応してくれたり、久々に人と関わりました。結果はコロナでした。それも家族三人全員が。

優しい時もつかの間、お会計が近づくにつれ、先ほどまで明るく、まちがい表情だった顔が、少し硬張っていました。わしろさ

めてうちのまわな・・・

（・・いくらかろう。

診察券を機械に入れなさい、母が呟くと一度診察券が表示されました。

（えっ？こんなするの？）

私は思わず声をあげました。今日、陽性以外何もしていないのにかかし、私の診察券を入れると、表示は二百円に。

（ええ？なんでやろ急についたん？）

私は安心と驚きを受けました。あ然とする私には母は

（子どもも医療費助成制度よ、ほんと助かるよね。）

と教えてくれました。

八月二十日、日曜日、熱は治まったし、体も全然痛くない。しかし、味覚と嗅覚を完全に失い、生きている意味すら感じなくなるほど、後遺症に苦しめられる今日この頃。

今、私はこども医療費助成制度について調べています。私は

「高校生への医療費助成が始まりました」

という船橋市のサイトを見つけ、読んでみると

ことにしました。それは、今まで、子ども医療費助成制度」の対象年齢は中学三年生までだったが、今年度からは高校二年生の年齢二八歳に達する日以後の最初の三月三十一日までまで拡大する、という内容のものでした。

「ありがたい・・・」

と思いました。

私は、幼稚園に入る前から花粉症を発症したり、プールを終っていた頃中耳炎にかかりやすくなったり、生まれる前から病気ことも多く、小さい時から何度も病院に通っていました。治療代は一万円、薬代は数千円という優しい助成があったから、今日まで健康に生きてこられたのです。そしてそれは、医師の皆さまが日々働いて、税を納めてくださっているからできることなのだ、改めて感じました。

「いつもありがとう、日本に生まれてきて本当に良かったです。」